平成30年秋期　六浦東地区推進連絡会

１　日時

平成30年10月30日(火)　19時00分～20時50分

２　場所

関東学院大学Foresight21・10階中会議室

３　参加者数　５５人

（地域側）自治会等地域団体関係　２３人
学校関係（瀬ケ崎小、六浦中、関東学院大学）　４人
（支援チーム、その他行政側）
区役所・市役所　１７人
区社会福祉協議会、地域ケアプラザ　７人
消防署・消防団　４人

４　「住み慣れた地域で　いつまでも元気に　暮らし続けるために」

資料２に沿って、國原区長から説明。

・金沢区の人口は平成30年２月に20万人を下回り、高齢化率は上昇し続け市の平均より４ポイント高い。
・健康寿命は個々人が健康かどうか主観的に判断しているもの。健康寿命以降が不健康かというと必ずしもそうではない。
・認知症がクローズアップされているが、介護保険の認定要因第１位は転倒・骨折。第２位は脳血管疾患。体が健康であることが大切であり、ロコモ予防などが大事になってくる。
・今年度も台風が多かったが、昼間に台風が通過したなら転倒・骨折などの被害も起こりえたのではないか。日頃からの予防が減災にもつながることを期待している。

５　「地域防災について」

資料３に沿って、総務課防災担当山本係長から説明。

①身近でどんな災害が起きるか。
・元禄地震相当の地震が起きた場合、六浦東地区では震度６弱から６強の地震が予想されている。また、津波による浸水被害は一部地域で予測されている。洪水・内水による浸水は一部の地域でひざ下くらいの想定で、そこまで浸水想定は深刻ではない。
・土砂災害警戒区域は県が指定しているもので、六浦東地域では３か所指定されている。毎年対象世帯にはポスティングを行って避難場所（関東学院大学12号館）を案内。

②災害時の避難場所
・地震、火災、風水害など災害によって開設する避難所、開設者が違っている。風水害の場合は区職員が関東学院大学 12 号館を避難所として開設するが、物資等はないため、より安全・快適に過ごせる親戚宅などを日頃から調整しておくことも大切である。

③災害時の備えと日頃から町内会で何をしておくと良いか。
・西日本豪雨で土石流が起きたが、民生委員中心に町内会で「担当制」を導入し、要援護者に担当する住民を決めていたため、けが人がゼロだった団地がある。

（質疑応答）

・六浦東地域のような小さな地域で震度が異なるということはありえないのではないか。
→昔海だった場所などは地盤が軟弱だったり、一方でがけ地は岩盤だったりと、地質により震度が変わるため、狭いエリアでも差が出る。また、地質の形状が砂質だと液状化の危険性が出てくることがある。

６　「消防団の活動」

資料４に沿って、金沢消防団第７分団佐藤副分団長から説明。

・消防団は普段は自分の仕事や学業をしながら、災害等で活動する非常勤・特別職の公務員。金沢区では 570 名以上の消防団員が地域の安全・安心を守っている。
・いざというときに消火活動が行えるよう、日頃から消火・放水訓練などを行っている。
・地域防災拠点訓練では、煙訓練や炊き出しの手伝いなど、地域の訓練の手伝いをするとともに、地域の皆さんに消防団を身近に感じてもらう機会となっている。
・その他、イオン金沢八景店、海の公園などでの広報活動、他区での合同訓練など、さまざまな活動を行っている。

７　グループワーク「地域防災についての意見交換」

・六浦東地域には、侍従川、急傾斜地、木造密集地域など、さまざまな課題がある。そうした課題をふまえたうえで、事前に地域でどのような備えをしないといけないのか、各グル―プ話し合い。

【Ａグループ（内川・和田山）】

・内川は、海抜ゼロメートルであるため津波、液状化、木造密集地域といった課題がある。要援護者をどう避難させるかが課題。和田山は、坂の凍結、転倒等の危険性がある。
・一方で、南共済病院が近くにあるため安心。
・関東学院大学生はかなりの人数だが、災害時にどのように避難するのか。訓練などはあるのか。地域が避難する際に協力してくれたら心強い。
・避難訓練は休日の昼間に行っているが、平日・夜間、また冬場の訓練も必要。拠点までの移動訓練もあると良い。
・各家庭に防災リュックを配っては。各家庭の安全を黄色タオルで知らせる取組ができると良い。
・地域の井戸は利用できるのか、どのような状況になっているのか調査できると良い。

【Ｂグループ（瀬ケ崎東部）】

・例年３月に一時避難場所である第２公園で訓練、11 月に地域防災拠点で合同訓練を実施している。
・地域のまちづくり委員が子育て支援も含め防災に取り組んでいる。
・地域の課題としては袋小路が多く、地震に火災が加わったときが怖い。
・黄色小旗は 300 世帯に配付済で、掲出訓練を行っている。また、援護者リストを役員４名で共有している。
・毎週夜間に防犯パトロールを行うほか、婦人部を中心に昼間の見守りを行っている。

【Ｃグループ（瀬ケ崎西部）】
・がけ崩れの危険性がある場所、民家のブロック塀が崩れそうなところがある。
・細い道が多く、消防車が入れないところも多い。
・学生向けアパートが多いが、学生は災害時の避難場所を把握しているか不明。
・市営住宅に高齢者が多い。
・今後、関東学院大学生、中学生に協力してもらえるよう地域から働きかけていければ。
・防災放送が充実すると良い。
・災害時に地域防災拠点同士で情報交換ができるよう、トランシーバーなどがあると良い。
・日頃から、ごみ捨て場くらいの範囲で、あいさつ、顔の見える関係性を築いておくことが大切。

【Ｄグループ（高谷・瀬ケ崎台）
・町内会によって取組内容の差が大きいと感じた。高谷では防災講演会を開催したり、避難経路を決めている。瀬ケ崎台はこれからの状況。
・自治会、民生委員、家庭防災員の連携が取れていない。
・要援護者の把握は個人情報保護の壁に阻まれ、進んでいない。
・発災後 72 時間は自助・共助で生きないといけないのであれば、町内会として最低限これだけは整備すべきという点を行政から示してほしい。町内会のやる気とセンスに任せるのは難しいのでは。

【Ｅグループ（室の木・第一合同・防衛省】
・建物は頑丈にできていると思われ、水害時には、避難所に行くよりも建物の上階層に避難した方が安全と考えている。
・室の木は高齢化が進んでいる一方、第一合同、防衛省は若い世代が多い。
・要援護者を把握はしているが訓練は未実施。１号棟増えたこともあるため、訓練していきたい。

（事務局から）
・本日、各町内会から各地域の課題について、今後まち歩きをして確認していきたい。まち歩きの日程については、各会長と調整の上、決定したい。

８　その他

(1)　金沢消防署（丸茂六浦出張所長）
・　火災件数は、市内・区内ともに昨年度より減っている。平成 23 年に住宅火災報知器の設置が義務づけられたことも大きいのでは。23 年に設置した家庭は、そろそろ住宅火災報知器の電池が切れる頃なので点検を。
・救急車の要請件数は昨年度よりも増えている。
・熱中症患者は昨年度の２．４倍となった。次年度以降も猛暑がありうるため注意。

(1)　瀬ケ崎小学校（梅田校長）

・今年度は通学路上のブロック塀の点検、新潟の女児殺害事件を受けての危険箇所の緊急点検など、通常のスクールゾーン対策協議会での点検を含め３回点検した。

・地域防災拠点訓練では、金沢区災害ボランティアネットワークに来てもらい、児童に対して防災教育を行いたいと考えている。

(5)　六浦中学校（山下校長）

・地域防災の観点から中学生が地域の力になれるよう丁寧に指導していきたい。

(6)　関東学院大学（中津准教授）

・４年前から取り組んでいるアスレの森ワークショップの報告書を作成した。次回ワークショップは 11 月 10 日地域防災拠点訓練後に予定している。時間があればぜひ参加してほしい。

・防災については、大学生への期待があると思う。昼間災害が起きたときに、若い力持ちたちが地域にどう貢献できるか考えていけると良い。

(7)　柳町地域ケアプラザ（佐藤所長）

・11 月講演会を開催予定。11 月３日の感謝祭では、地域にある障害者施設と合同で行う計画を立てている。

(8)　区社会福祉協議会（山下事務局次長）

・地域の方々の課題を参考にしながら、今後も地区担当がお手伝いできればありがたい。